

カンムリウミスズメ



カンムリウミスズメ。日本近海のごく限られた島にだけ生息する。全長二十四センチメートルほどの小さな海鳥。絶滅の危機にある。

このカンムリウミスズメを知ったのは、この夏のことだった。海辺を走る見慣れない自動車。それに乗っている人たちがみんな同じデザインのTシャツを着ている。“Amour de la mer (アムール・ドウ・ラ・メール)”のロゴと海に漂う愛らしい親子の鳥。頭に飾り羽をもっている海鳥のイラストだ。

急いで家に帰り隣に住む祖父に聞いてみた。しばらく

祖父は考えていた。

「それは、カンムリウミスズメという鳥じゃろう。この鳥の観察ツアーが明日あるので、大学の先生や野鳥の会の専門家の人達が日本中から来るといいう話じゃった。」

「おじいちゃん、それはどんな鳥？」
「わしもめつたに見たことはないが、昔からおった。両方の手のひらに載るぐらいの大きさと、冠みたいな飾り羽が、かわいらしい鳥じゃった。船で近付いたら、ふっとおらんようになって、気が付いたら三十メートルほど先に浮かんでくる。ペンギンみたいによく泳ぐ鳥で、飛ぶには飛ぶが、あんまり高いところは飛ばない。海面すれすれをちよつと飛ぶぐらいの鳥じゃった。」
と、得意そうに話す。

「へえ、おもしろそうな鳥だねえ。おじいちゃん、僕も船に乗せてもらえないかねえ。」

「うーん、ツアーの漁船の船長さんに頼んでみようかのう。でも珍しい鳥なんで、見つからんでも、がっかりするんじゃないぞ。」

次の日、朝、晴天、波は静かだ。海が「やって来い。」と呼んでいる。午前十時、倉橋町鹿老渡港を観察船が出航。僕はツアーのお手伝いとして乗船できた。救命胴衣をつけ、仕事の内容は、ツアー客に弁当を配り、回収すること。目指すカンムリウミスズメは倉橋島と橋続きの鹿島の沖で生息している。広島県でも一番南の海域だ。

「よっ、中学生。よく来てくれたね。」
船内を見渡すと、声の主は地元の白華寺の住職さんだった。このツアーは住職

さんが活動している「宝島くらはしまちづくり協議会」の企画なのだそうだ。住職さんは僕にカムムリウミスズメについて詳しく話してくれた。

「地球に誕生した生物は、姿や生態を進化させながら生き続けてきた。カムムリウミスズメは外敵を攻撃する鋭い爪やクチバシ等がないかわりに、水中でしっかりと水がかかるよう骨格を強くし、足には水かきをつけ、荒波のなかでもすいすい泳げるよう進化した。空を飛ぶのは得意ではない。地上の歩行も得意ではない。空と海の間を生き続けるめずらしい鳥なんだ。」

「でも、どうしてカムムリウミスズメの観察に倉橋を選ぶの？」

「それはね、この鳥の住める海が少ないからなんだよ。カムムリウミスズメは今、絶滅の危機にあるんだ。生息地域は日本近海の数カ所で、その一つが倉橋の海なんだ。」

「カムムリウミスズメの数は約五千羽。倉橋町の人口は六千五百人だから、地球上に人類がこの町の人たちだけと考えると考えたらどうだろう。数が少なくなった原因は、タンカー事故で流出した大量の油が体について死んでしまったり、人間が捨てたゴミにカラスやドブネズミなどが集まり、それがカムムリウミスズメの卵やヒナを襲ったりすること等によるものなんだよ。私たちの世代で、あるいは私たちが絶滅させることになるかもしれないんだ。」

（僕たちの世代で……）

僕は、同船した日本野鳥の会の青年にTシャツの“Amour de la mer”の意味を聞いてみた。

「この言葉の意味は、『海に愛を』というフランス語なんだよ。僕たちがそれぞれどんな海の愛し方をするかは、一人一人違うかもしれないね。カムムリウミスズメを守るということは……。」

その後は、漁船のエンジン音にかき消されてよく聞こえなかった。

波に揺られながら、しばらく僕はぼんやりと考えていた。いつも見ていた倉橋の海が、今日は少し違って見えた。

気がつくとエンジン音が小さくなり、船長さんの低いささやき声が聞こえた。

「……左舷前方五十メートル。カムムリウミスズメ二羽
発見。観察開始……。」

*カムムリウミスズメ・・・日本の天然記念物であるが、絶滅が

心配されている。冠羽が特徴的であるが、特に驚いた時等の

他は滅多に冠羽を立てることはない。



カムムリウミスズメ
飯田知彦氏撮影